平成30年度（2018年度）

指定重要文化財答申資料

有形文化財（彫刻）	木造不動明王及二童子立像	3躯
有形文化財（絵画）	紙本著色板貼付釈迦三尊図	1面
	附蓮池図板戸	4面

平成31(2019年) 2月 12日

横須賀市教育委員会

例　　言

1　本報告は、教育委員会教育長から平成30年12月19日付けで諮問のあった「平成 30 年度の指定重要文化財等の新指定」についての答申のための指定候補文化財の詳細調査報告である。

目　　次

1　有形文化財（彫刻）
木造不動明王及二童子立像 …… 8
調査者　文化財専門審議会　瀬谷貴之

2　有形文化財（絵画）紙本著色板貼付釈迦三尊図　附蓮池図板戸 …… 12
調査者　文化財専門審議会　岩橋春樹

有形文化財（彫刻）

木造不動明王及二童子立像

瀬谷　貴之
（市文化財専門審議会委員）

鎌倉時代
像　高　不動明王立像 49.5 cm
矜羯羅童子立像 24.2 cm
制吒迦童子立像 25.0 cm
所在地　横須賀市西浦賀２丁目５番
所有者　宗教法人常福寺
数　量　３躯

横須賀市西浦賀に所在する、常福寺の本堂内に安置される不動三尊像。常福寺は光放山延寿院常福寺と号し、文明年間（1469～1486）に鎌倉光明寺の教誉上人により開山されたという。享保五年（1720）に浦賀奉行所が開設されると、浦賀地区を代表する寺院として本陣（御用寺院）の役割をはたしたことが知られる。ただし本不動三尊像は、かつては近隣の叶神社(西叶神社)の別当であった感応院西栄寺の本尊で、明治初年の神仏分離の際に常福寺に移座されたものである。

中尊不動明王立像は、頭部は巻髪とし頭頂に七莎髻を結って左耳側に弁髪を垂らす。両眼は見開いて右上を見る。条帛、裳、腰布を着け、右手に剣、左手には羂索を執って、やや右に腰を捻って岩座上に立つ。左脇侍の矜羯羅童子立像は総髪として、中尊不動明王像と同じく条帛、裳、腰布を着け、右手に宝棒、左手に蓮茎を執って、右上を向く。右脇侍の制吒迦童子立像は頭部を巻髪として、両肩に天衣を懸けて裳を着け、大きく右に腰を捻って右腰脇で剣を突く。二童子はいずれも中尊不動明王像の両脇岩座上に立つ。なお装飾金具として三尊の胸飾の基本帯（瓔珞を除く）、不動明王の臂釧・腕釧・足釧、矜羯羅童子の腕釧・足釧、制吒迦童子の腕釧は造像当初の金銅製のものが残存するのは貴重である。

その構造は、中尊不動明王像は布貼を施して錆漆地とし彩色を施す。おそらく耳半ばで前後に矧ぎ、両肩、両肘、両手首、両足先など矧ぐ。面部を矧いで玉眼を嵌入する。裳と両脚の境目で割矧ぐ、割脚とする。両脇侍は両肩、両肘、両足先などを矧ぎ、面部を矧いで同じく玉眼を嵌入する。矜羯羅童子は体幹部を前後に矧ぎ、割脚とするか。

本像は比較的小像ながら、太い体躯、意志的な面貌、大腿部の裳にみられる写実的な衣文表現などから、一見して、運慶にはじまる慶派仏師の系譜を引く作品と認められる。また平安時代後期風ともいえる精緻な切金を施す当初の彩色文様が、不動明王像の条帛や裳などの着衣部分を中心に残存し保存状態も良好である。加えて両脇侍像も当初のものが残ることは特筆される。おおよそ、造立年代は鎌倉時代中期とみられ、運慶やその工房作品が多く残る横

須賀市内にあって、浄楽寺や満願寺、曹源寺などの諸像造立後の慶派作品の展開を考えるうえで重要作品に位置付けられる。本像は今後、横須賀市内のみならず、鎌倉地方文化圏においても特筆される彫刻作品として注目されるものと言えよう。

なお厨子及び岩座、三尊の持物、不動明王像の左胸前の条帛折返し、腰紐の垂下部、制吒迦童子の右手首先、両天衣先などは近世の後補となる。

不動明王及二童子立象

不動明王（顔正面）

不動明王（顔右側面）

不動明王（背面）

矜羯羅童子（顔正面）

有形文化財（絵画）

紙本著色板貼付 釈迦三尊図　附蓮池図板戸

岩橋　春樹
（市文化財専門審議会委員）

戸川雪貢筆　天保８年(1837)款記
紙本著板貼付　縦205.2×横349.5cm
所在地　横須賀市芦名２丁目2433番
所有者　宗教法人浄楽寺
数　量　１面、附４面

浄楽寺本堂の来迎壁背面に大きく描かれた釈迦三尊図である。画面中央に釈迦を、左右に騎獅文殊、騎象普賢を配した釈迦三尊図通例の図柄によっている。朱衣の釈迦は蓮台上に坐し、背景に湧雲を置く。蓮台の蓮弁は繧繝文様で装飾される。

三尊、獅子や象をとらえた筆線は滞りなく闊達で、構図も整っている。大画面は破綻なくまとめられ、画家の優れた技量をうかがわせる。惜しむらくは、絵具の剥落と変色、料紙の破損が一部目立つ。

画面向かって左下部分にある款印に「天保八□春／□府住 戸川雪貢拝画印」とあるほか、壁面下部の地袋板戸裏面の墨書には「天保八年丁酉五月」、「釈迦文殊普賢画像造修／画師鎌倉雪之下／戸川雪貢」等ともあって、天保八年(1837)の年紀と鎌倉雪之下戸川雪貢の筆になることが知られる。なお、地袋板戸は四面、それぞれ蓮池図が連続式に描かれており、これも雪貢の筆であろう。

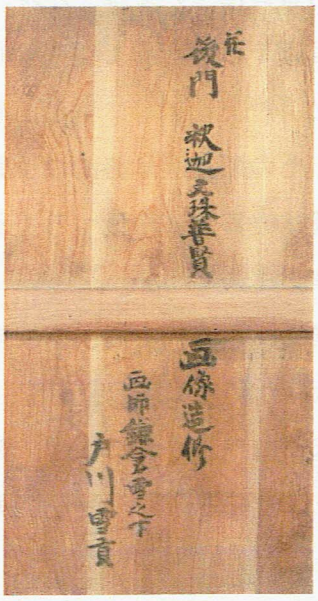
戸川雪貢については、往時の鎌倉ガイドマップというべき木版刷り鎌倉絵図の版元の一つ、或いは版下絵師として従来知られてきた。数種ある戸川版の絵図には「鎌府住雪貢写」、「鎌倉雪之下戸川氏」等、釈迦三尊図と類似の識語が見られる。すなわち、この雪貢は同一人であり、その画業が本格的な仏画にまで及んでいたことが了解されるわけである。おそらく鎌倉鶴岡八幡宮寺に奉仕する立場の人であったかと推測されるが、現状、これ以外に雪貢の作例は確認されていない。

本堂は江戸時代中期、享保年間の造立と推定されている。以後たびたび改修がなされており、天保八年には来迎背面壁（本堂後陣）の荘厳がなされたのであった。

幕末期に制作された仏画、それも寺院障壁画の大作として注目されるとともに、戸川雪貢という鎌倉在地画家の希有な画蹟としても評価される。

釈迦三尊図

蓮池図



左：落款

右：板戸墨書